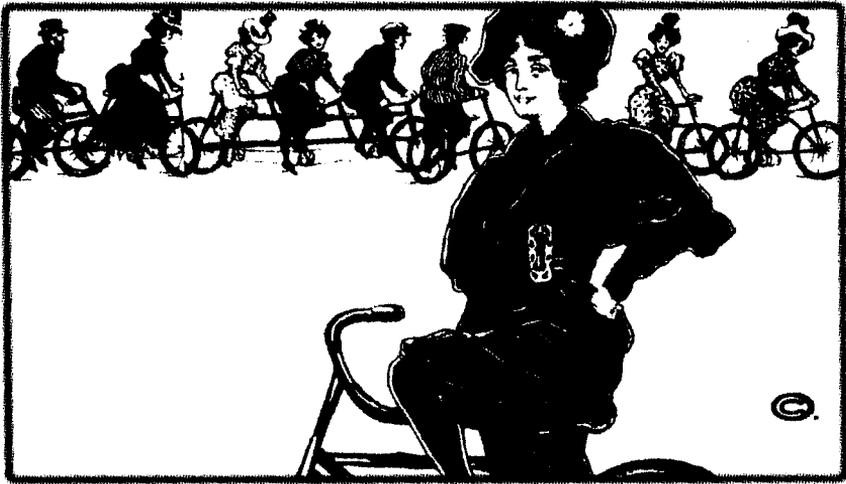


第7章

『余計者の女たち』

(*The Odd Women*, 1893)



“The Championess,” in Trevor Lloyd,
Suffragettes International: The World-Wide Campaign for Women’s Rights
(British Commonwealth and American Heritage Press, 1971)

作品の梗概

『余計者の女たち』は、19世紀後半の〈余計者の女たち〉、つまり「結婚する相手がいない女たち」が50万人もいて、社会問題となった当時の模様を描いた小説である。物語は、レディであることと賃金労働者であることが一致しない時代にあつて、中産階級出身である彼女たちを自活させるために、女性に大学教育や職業訓練を与えようという気運が高まったヴィクトリア朝ロンドンを舞台に展開する。主要な登場人物は、医師であった父親の死後、何とか生計を立てていかなければならないマドン (Madden) 家の3姉妹と、女性たちのための職業訓練学校を共同で経営するメアリ・バーフット (Mary Barfoot) とローダ・ナン (Rhoda Nunn) の、5人の女性たちで、これら2組の女性たちをめぐる二つのプロットは、物語の進展とともに次第に深く絡み合っていく。

マドン姉妹の父親が亡くなって16年が経過した頃、コンパニオンの仕事を失った次女ヴァージニア (Virginia) は、末の妹モニカ (Monica) が住み込みの店員として働くロンドンにやってくる。下宿を探し、間もなくそこにガヴァネスの職を失ったアリス (Alice) も合流して、ふたりの〈余計者の女たち〉のつつましくも悲惨な生活が始まる。父親が3人に残してくれた800ポンドを少しずつ切りくずしながら生活する、あまりにも希望のない生活をまのあたりにしたモニカは、姉たちのように〈余計者の女たち〉にならないために、何とかして結婚相手を見つけないかと切望する。そんな姉妹のところへ故郷クリーヴドン (Clevedon) にいた頃の知り合いであるローダ・ナンから手紙が届き、彼女もロンドンに住んでいると知って、ヴァージニアはローダに会いに出かける。ローダは、自立して働くいわゆる〈新しい女〉になっていた。彼女は、母親の死後、速記や簿記やタイプライターを学び、現在はその時の先生であったメアリに請われて、彼女の職業訓練学校の共同経営者として働いていたのである。ヴァージニアから、店員として働くモニカのひどい労働条件を聞いたローダは、モニカが現在の過酷な仕事をやめてローダのところで職業訓練を受け、より有利な仕事につくよう説得する。結局その勧めに従って

お店をやめたモニカは、ミルドレッド・ヴェスパー (Mildred Vesper) と一緒に住みながらタイプライターを学ぶことになる。しかしながら、決して〈余計者の女〉として自立して生きていきたいわけではなかったモニカは、街中で偶然声をかけられた彼女より 20 歳も年上で風采のあがらないエドモンド・ウィドソン (Edmund Widdowson) と、彼を愛したからではなく、彼が弟から年 600 ポンド遺された財産家であるという理由で、結婚することに決めるのである。

だが、陰鬱でかつ茶番劇のような結婚式と 7 週間の新婚旅行の後に始まったウィドソンとの結婚生活は、当初の予想とは違って、不自由で息のつまるようなものだった。モニカに〈家庭の天使〉の役割を求め、妻を四六時中監視していなくては気のすまない彼は、彼女が以前からの習性で付き添いもなくひとりで外出し、彼女の以前からの友人たちに会うのを極度にいやがる。特に、女性解放を唱えるローダとメアリの訓練学校に出入りし、彼女たちの影響を受けたり、そこで以前に顔を合わせたことのあるメアリの従弟のエヴァラード・バーフット (Everard Barfoot) のような男の誘惑にさらしておくのを嫌った。あまりにも閉塞的な生活にどんどん顔色も悪くなっていくモニカは、夫に外国旅行を提案するが、妻がいかかわしい男たちと知り合いになることを心配する彼は、それに踏み切ることができない。結局、モニカの健康を心配した義妹のルーク・ウィドソン (Luke Widdowson) の外出の誘いを妻が断ってくれたお礼に、彼はモニカを国内のガーンジー島 (Guernsey) に休暇につれていくことにする。そこでモニカは、メアリたちの所に出入りしているコスグローヴ夫人 (Mrs Cosgrove) と出会い、夫人の滞在するホテルで、ビーヴィス夫人 (Mrs Bevis) と 3 人の娘と息子のワイン商のビーヴィス氏 (Mr Bevis) に紹介される。どうやら夫は、エヴァラードの時とは違って、ビーヴィス氏には好感を抱いたようなのだが、この後モニカは、専制君主的な夫に対する嫌悪感を増すにつれ、次第にビーヴィスに惹かれていき、遂には英国を離れる彼と駆け落ちをしたいとまで思いつめることになる。

一方、若々しく自信に満ち、センスのよい着こなして独得の魅力を放つローダに強い関心を抱き始めたエヴァラードは、メアリとローダの所に足しげく通ってくるようになる。彼は、結婚できない女性の自活を支援するローダの志が、どの程度堅固なものかを確かめるため、ローダに恋をけしかける実験を試みようとする。エヴァラードは、かつて下層階級の女性エイミー・ドレイク (Amy Drake) とのスカンダルがもとで父親の怒りをかい、遺言で結局 450 ポンドの年金しかもらえなくなる。が、本来彼のものになるはず

だった多額の遺産は、従姉のメアリに遺され、メアリはそのお金を元手に、職業訓練学校を始めたことを、ローダはメアリから聞く。そのエヴァラードから愛の告白をされ、これまでに恋愛経験のなかったローダは、エヴァラードのような魅力的男性、とりわけ兄のトム・バーフット (Tom Barfoot) の突然の死後、年収 1,500 ポンドを相続することになり、だれもが羨むような結婚相手となった男性のプロポーズを断れば、今後は迷うことなく自らの使命に邁進できるに違いないと考え、大いに自尊心がくすぐられる。ローダにはエヴァラードのことを悪漢扱いしていたメアリであったが、実は彼女は以前ひそかに彼に恋していたことがあり、彼の起こしたスキャンダルにとっても苦しんだという過去があった。しかしながら、自殺をしたベラ・ロイストン (Bella Royston) というかつての生徒に対する対応をめぐるローダと対立していたメアリは、彼女と和解するとともに、ローダとエヴァラードの恋に対しても、ひそかに応援しようと決意する。

このふたりの恋を応援していたのは、メアリだけではなかった。モニカはこれまで数回にわたって、エヴァラードから偶然に、彼のローダに対する恋心を聞かされる機会があり、ローダの強さに羨望を抱いていたモニカは、彼の求愛がうまくいくよう心から願っていた。そして恋人のビーヴィスが英国を発つ直前に、彼のもとを訪れようとしたモニカは、またも偶然に恋人と同じフラットに住むエヴァラードに出会い、彼がカンバーランド (Cumberland) に休暇に出かけたローダを追いかけて行くつもりであることを聞かされる。モニカは、ビーヴィスを愛していたが、決して彼の誘惑に完全に屈していたわけではなかった。しかしながら、夫が彼女を故郷のクリーヴドンに閉じ込めたがっていることを知ったモニカは、遂に駆け落ちを決意し、その段取りのために再びビーヴィスのフラットを訪れる。その際に、周辺をうろろろしていた職人風の男 (後に夫が依頼した私立探偵だと判明する) を見かけ、とっさに危険を感じた彼女はその男の目をごまかすため、ビーヴィスの部屋ではなく、留守だと知っていたエヴァラードの部屋のドアをノックする。モニカは直後に、過度の緊張から、ヒステリー症の発作を起こして失神してしまうのだが、結局このことが夫の耳に入り、エヴァラードとの関係を疑われることになり、その疑いをウィドソンから聞かされたメアリを経由して、ローダの知るところとなるのである。

カンバーランドで落ち合ったローダとエヴァラードは、情熱的なキスを交し合い互いの愛を確認しあう。しかしながら、自由恋愛の申し出をしたエヴァラードと、彼の誠意を信じきれないために法的な結婚を望むローダとの

間では、互いに意志を通すことにこだわってせめぎあいが続く。そして結局ローダの意志が勝利をおさめて、ふたりは法的に結婚する約束をするにいたる。だが、その直後に、メアリからの手紙を受け取って、上記のエヴァラードとモニカとの関係についての疑惑をつきつけられたローダは、彼からの釈明の言葉もひきだせないまま、そして一方のエヴァラードはローダに信じてもらえないのを屈辱と感じて、ふたりの関係は決裂したまま終わってしまうのである。

エヴァラードと別れたあとローダは、彼に対する欲望に苦しみ、かつて少女の頃にスミスソン氏 (Mr Smithson) に対して感じた失恋の痛手を思い出して悲しみにくれる。真相究明には気が進まないローダであったが、メアリに促されてモニカの姉のヴァージニアと会い、モニカとウイドソンとが別居中であることを知らされる。失神以来健康がすぐれないモニカは遂に、ウイドソンがばらまいたエヴァラードとの事実無根のスクャンダルを正すため、勇気をふりしぼってローダに会いに行く。そして、彼とは何の関係もないこと、彼とはローダのことを話題にできるのが嬉しくて話し込んでいただけであること、モニカの恋の相手は彼ではなく、彼とおなじフラットに住むローダも知っている別の男性であったことなどを、恥をしのいでローダに告白するのである。それを聞いたローダは、羞恥心をのりこえて真実を告白してくれたモニカの勇気に促され、またモニカが妊娠中であることに気づき、お腹の子供のためにも強く生きるべきであること、将来は一緒に女性の権利のために闘う同士となるべく未来に希望を持つことを、モニカに説く。こうしてふたりの女性は、互いに感動を共有しながら、熱いキスを交わし再会を約束して別れる。そしてモニカから逆に勇気づけられたローダは、エヴァラードからの再度のプロポーズをはっきりと断り、働く女性たちを支援する使命を再確認するのであった。求婚を断られたエヴァラードは、2週間後に、これまで交流のあったアグネス・プリセンデン (Agnes Prissenden) と結婚することを決め、かつて彼の数学の個人教師で、小説中で唯一幸福な結婚をしたトマス・ミクルスウェイト (Thomas Micklethwaite) にそのことを報告する。一方、田舎にひっこんで女の子を出産したモニカは、その子が夫の子である証拠を同封した手紙を書き残した後、衰弱して亡くなってしまふ。そして赤ん坊の世話は長女のアリスに任されることになる。次女のヴァージニアの方は、ロンドンでの悲惨なく余計者の女の生活からの逃避をブランデーに求め、アルコール依存症になってしまっていたが、その事実がアリスやモニカの知るところとなって、彼女自身施設に入ることを希望する。またウイドソ

第7章 『余計者の女たち』

ンは、ロンドンで友人のニューディック (Newdick) と暮らすことに落ち着く。こうしてモニカの葬式から3ヶ月たった夏の日、赤ん坊とアリスを訪れたローダは、アリスの口から以前からの希望であった学校を始める計画を告げられ、その学校の最初の生徒となるだろうモニカの娘に、モニカの面影を見出しながら、「可哀想な子」とつぶやくのだった。

狂気の遊歩者 —身体記号としてのモニカ—

ジョージ・ギッシングが、社会的に大変動期にあった英国の 1890 年代前後を主要な活躍の舞台としていることは、彼の小説を読む上で決して忘れられてはならないだろう。この変革の時代を鋭敏に反映する彼の小説においては、しばしば世の中の周縁に置かれた、社会的に境界線上にいる人々にスポットライトが当てられている。このことは、無階級といえるほどに貧しい人々、正当な場からはずされた知識人、妻という役割に安住できない女性、世間から余計者扱いされる未婚の女性、良心的ではあるが売れない三文作家たちなどを描いた、『無階級の人々』(1884)、『ネザー・ワールド』(1889)、『三文文士』(1891)、『余計者の女たち』(1893)、『渦』(1898)などをみれば明らかである。階級的追放者や余計者の女たち、挫折した知識人たちなど、ギッシングの小説人物たちは、まぎれもなく 19 世紀末のヴィクトリア朝英国、とりわけその多くは、ヘンリー・ジェームズ (Henry James, 1843-1916) が評した「恐るべき歓楽の都市」ロンドンの住人に他ならない。彼(彼女)らは、階級や性によって定められている生活領域の枠を超えて世紀末英国をうごめき、ロンドンという一大記号都市を織り成していく。

近年〈新しい女〉小説として再評価されてきた『余計者の女たち』ではあるが、この小説においてもわれわれ読者の視線と関心を集めるのは、〈新しい女〉ローダ・ナンであるよりは、むしろローダのような〈新しい女〉にもなれず、姉たちのような〈余計者の女〉にもなりたくない、だからといって貞淑な妻となることにも失敗してしまう、境界性を幾重にも身にまとったモニカ・マドンの方であるかもしれない。ここで対比的に描かれている、新しい女ローダと新しい男志願のエヴァラード・バーフットという新進のカップルと、モニカとエドマンド・ウィドソンという旧弊な価値観に捕らわれている夫婦の、2 組の男女のうち、とりわけ後者ふたりの応酬の激しさと問題の切実さは、当時の読者だけでなく、今日のわれわれの胸をも衝かずにはいない。妻であることにも職業人となることにも違和感を持ち、中産階級から労働者階級へ、そして再び中産階級へと横断を続けながら、シャペロンの同伴

なしにロンドンの街を彷徨し、当時を代表する女性の病であるヒステリー症を患うモニカは、それゆえ時代を表象する、すぐれて世紀末的な身体記号となる。

本論は、『余計者の女たち』において、時代を映す鏡として機能するモニカの身体とそれを支える当時の医科学やジェンダー言説の分析を通して、そうした多義性を孕んだ身体表象を可能にする当時のロンドン、ひいては旧弊の価値観が大きく変動しつつあった英国社会を解説する試みである。

第1節 都市を彷徨する女遊歩者

モニカの父マドン医師の死で始まり、モニカの娘の誕生で終わるこの小説の本筋は、1887年のクリスマス、父親の死後16年を経て結婚の見込みもなく年を重ねたヴァージニア・マドンの、ロンドンでの下宿探しで幕を開ける。これはまた、父親の死によってレディの身分から零落し、コンパニオンの仕事も失った後、父親が残してくれた僅かばかりの年金で暮らさなければならなくなった〈余計者の女〉としての彼女の、都市における悲惨な生活の幕開けでもあった。次女ヴァージニアと後にその下宿先に同居することになる元ガヴァネスの長女アリスとの、あまりにも痛ましい老嬢生活よりは、末娘のモニカに、この都市で独身のまま自活して生きることを極度に嫌悪させる。そのため彼女は、店員の仕事をやめ、よりよい仕事を得るためにローダとメアリ・バーフットが経営する職業学校で訓練を受けて自活するという未来図よりも、偶然知り合いになった風采のあがらない財産家のウイドソンとの結婚を選ぶ結果になる。このようにこの小説は、表題が示すとおり紛れもなく世紀末に生きる〈余計者の女たち〉の赤裸々な記録となっているので、われわれ読者は一方ではモニカを愚かだと思いつつも、その一方でモニカの結婚衝動の切実さを、説得力のあるものと受け止めることができるのである。

さて、モニカは無事ウイドソンとの結婚にたどり着くことができる。だが、ふたりの求愛のプロセスは、モニカ自身が恥じていたように、また小説中何度も周囲の人々によって囁かれているように、当時の性規範から外れた不名誉なものであった。生まれは中産階級でありながら、後見人を持たない田舎出身の孤児でスコチャー商会 (Messrs. Scotcher and Co.) のしがない店員のモニカは、彼女の唯一の休日である日曜日に恒例となっている付き添いなしの散歩の最中に、彼女の美しい容貌に心惹かれたらしいウイドソンに声を

かけられる。貧しい同僚に声をかけられた際には彼の誘いを即座に断っておきながら、立派な服装をしたウイドソンに対しては、再会の約束をしてしまうモニカは、みずからの無鉄砲さに、「女中の地位まで堕ちてしまった」(36)と感じてしまう。列車でヨーク・ロードからウォルワース・ロードまで帰ろうとする彼女が、「ロンドンの交通の便についてすでによく知っていること」(51)に対して、ウイドソンが疑いのまなざしを向けたように、彼女はこの日たまたま一人歩きをしていたのではなく、夜間遅くまで一人で彷徨するのは店員である彼女の常習なのである。モニカは何度かウイドソンに待ち伏せされ、身の危険を感じるのだが、このように行きずりに声をかけられてその誘いに応じるという行為と、ロンドンの街じゅうに溢れる売春婦が、商談に応じる行為とを区別するものは、実は何もない。モニカはそのことを、十分すぎるくらい承知している。かつての同僚のミス・イード (Miss Eade) は、再会した折には傍目にもすっかりそれとわかるような、「余計者の女たちの重要な一典型」(343)である売春婦に身を落としていた。店をやめるモニカの引越前夜、姉妹3人が路上で今後の相談をしていたすぐ脇で、売春婦が客と商取引をしていたために、姉妹が相談場所を移さざるをえなかったように、家庭的な情景と売春行為との共存を可能にするのが当時の夜のロンドンなのであった。行きずりの出会いから始まったモニカとウイドソンとの交際が、いかに「世間の規則に従わない」ものであるかは、結婚発表後のローダ・ナンの、「あの娘は往来や脇道で行きずりの男の人なんかと知り合いになるような娘ではないと思っていたけど」(135)という発言からも、またウイドソンの義妹で、彼が売春婦の類のような、「真実のことを告白できないような人と結婚しようとしている」と思いこんでいたルーク夫人が、モニカに会った後に、彼女を評して「心配したほど悪くはなかった」、「彼女、なかなかあっぱれだわ。お利巧な小悪魔」(133)と皮肉を言う、その言葉の端々からも明らかである。

中産階級の女性がシャベロンの付き添いなしで外出するのが、まだまだ珍しかったこの時代において、モニカのように結婚後も一人きりの彷徨を止めることができない女性たちは、明らかに当時の女性の性領域を逸脱しているだろう。ジュディス・R・ウォルコウイツ (Judith R. Walkowitz) やジャネット・ウルフ (Janet Wolff) が指摘しているように、ジェームズが「恐ろしき歓楽の都市」と評したような当時のヴィクトリア朝末期のロンドンには、迷宮のような都市を徘徊し観察する「男性の遊歩者」“male flaneur”によって特徴づけられていた。「都市を歩き回る自由」を享受していたボードレールの男性の

「遊歩者」は、その彷徨において、観察者であると同時に観察される客体として、都市を自在に歩き回りながら「決して他と交わることのない」、世紀末の都市を語る上で欠かすことのできない「モダニティの象徴」でもあった。¹しかしながら、こうした「男性の遊歩者」よりもさらに両義性を持っていたのが、真正の「公共の女」たる売春婦であり、売春婦と見紛われた女たちであった。彼女たちは、街路に集っていた男たちにとって、「危険にさらされていると共に、危険の源」でもあり、「性的混乱もしくは、下層階級の人目につく陳列の象徴」として、このロンドンという想像的な景観において、多義性を持った象徴的な位置を占めていたのである。²しかしながらさらに、ウォルコウィッツやエリザベス・ウィルソン (Elizabeth Wilson) の研究は、女性の解放運動が推進されたこの時代にあって、男性の領域とされた都市を一人で彷徨して売春婦に見間違えられたのが決して下層階級の女性に限られていたわけではないことを教えてくれる。³新しい女を描いて一躍脚光をあびることになった『アフリカ農場物語』(*The Story of an African Farm*, 1883)の著者オリヴ・シュライナー (Olive Schreiner, 1855-1920) が、一人歩きをしていて売春婦と間違えられたように、⁴夜のロンドン彷徨者には、新しい女、女店員、慈善活動家、女性ジャーナリスト、事務員やタイピストといった、新しい範疇の女たちも含まれていたのである。結婚前もその後も、その街歩きのためにウィドソンに疑念を抱かせたモニカや、悲惨な生活の捌け口として、駅の PAP でブランデーを求めぬ姉のヴァージニアは、紛れもなくこうした世紀末の都市を自在に彷徨する、女遊歩人に他ならないのだ。

モニカを特徴づける、都市空間における移動性は、当然のことながら当時の女性の領域としての家庭と、決して相容れることはない。〈家庭の天使〉たる女性と実業に生きる男性の活動領域とを、外と内とに明確に区分するジョン・ラスキン (John Ruskin, 1819-1900) の『胡麻と百合』(*Sesame and Lily*, 1865) を信奉するウィドソンが、彼女を家庭の中に閉じ込めようと躍起になって挫折することになるのも、また彼女が彷徨を止めることができないのも、従来の性基準が揺らぎつつあった性的無秩序の時代が生み出した齟齬に他ならない。それゆえ、彼らの結婚がうまくいかないのも「この忌わしいロンドンが私たちの間に割り込んできた」(257) せいだ、と主張するウィドソンは、彼女の身体が帯びる記号的属性をきわめてよく理解しているといえるだろう。

第2節 優生学的「自然らしさ」の言説

「モニカの成人」(“Monica's Majority”)という4章の最後で、ローダは、この小説のテーマである〈余計者の女〉の問題についてモニカに次のように説明する。

So many *odd* women—no making a pair with them. The pessimists call them useless, lost, futile lives. I, naturally—being one of them myself—take another view. I look upon them as a great reserve. When one woman vanishes in matrimony, the reserve offers a substitute for the world's work. True, they are not all trained yet—far from it. I want to help in that—to train the reserve. (41)

ローダが熱っぽく語っているのは、1862年に『ウェストミンスター・レビュー』でW. R. グレグ(W. R. Greg)が警鐘を鳴らし、19世紀後半の英国中流・上流階級で特に深刻な社会問題となることによって、女性解放運動の火つけ役ともなった「女余り現象」のことである。ここでいう「余った」「odd」とは、「ペアを組む相手のいない」、「半端な」という意味で、グレグの評論が示しているように、これが女性の形容に用いられると、本来女性は結婚すべきであるのに、母親として、また妻としての「自然な義務」を遂行しそなった、矯正されるべき「変則」「anomaly」という、極めて否定的な含蓄を与えられることになる。⁵しかしながらローダは、結婚する女を「自然」、余った女を「変則」と規定する言説に対抗して、むしろ〈余計者の女〉を、訓練を受けて社会的に立派な仕事を果たすことができる人材の「予備軍」と捉えることにより、〈余計者の女〉に付与されている否定的な含意を反転させてみせる。そして、彼女たちに適切な訓練を与えるのが自分の使命だと言って、結婚前のモニカにその「予備軍」となり〈余計者の女〉の仲間入りをすることを勧めるのである。

グレグの評論が示唆するように、ヴィクトリア朝社会において、当時浸透していたダーウィニズムは医科学的言説と手をたずさえ、女性のイメージを固定化させ性的差異を「自然化」してきた。結婚して子供を生み育てることが女性の本質であり、母性こそが女性の証とされたこの時代には、高度の教育を受けた〈新しい女〉は、生殖器官が未発達であるために好ましくないとされ、優生学的には「退化」として位置づけられ非難されることになる。たとえばチャールズ・G・ハーパー(Charles G. Harper)は、彼の書物『反逆される女』(*The Revolted Woman*, 1894)の中で、性規範から外れた〈新しい女〉は

「自然」からの逸脱であり、その結果彼女たちは子孫において自然から復讐されるのだと書いている。つまり負の符牒を帯びた〈新しい女〉は、たとえ母になったとしても、この世界を「発育不全の水頭症患者の子供たち」で満たすことによって、「種族の究極的な消滅」をもたらすことになるというのである。⁶このように、当時流布していた女性をめぐる言説は、再生産(reproduction)に貢献する女性の性役割のみを「自然」とし、新しい女も余計者の女もともに、「種族の母としての女性の役割に対する脅威」とみなすことにより、彼女たちを逸脱もしくは劣位として範疇化していったのだ。ちなみに、ギッシング自身がこうしたダーウィニズムによる範疇化に大きな関心を持っていたことは、『三文文士』からもうかがえる。ここで彼は、「当代の人」「a man of his day」ジャスパー・ミルヴェイン(Jasper Milvain)と売れない作家エドウィン・リアドン(Edwin Reardon)とを対比的に描くことによって、社会的成功を追求する世俗の男性性を優位に位置づける、当時の進化論的社会淘汰の思想に疑問を投げかけている。⁷

しかしながら、メアリ・プーヴェイ(Mary Poovey)の論を俟つまでもなく、女性をめくって当時流布していたこうした言説は、決して「自然」ではありえない。プーヴェイによれば、産業資本主義経済のもとでは、次第に男/女、外/内という領域の分化と階層化がなされた結果、女には、賃金労働者としての男に避難場所を提供する〈家庭の天使〉としての役割が賦与され、それがあたかも女の「天性」「by nature」に基づいた「自然」「nature」であるかのように馴化されていった。つまり、性領域の分断と女の囲い込みは、決して「自然に」発生したのではなく、それ自体「社会的な構築」にすぎないのである。⁸『余計者の女たち』においても、〈家庭の天使〉という役割を果たさない女を自然からの逸脱とみなす言説は、女性解放思想と至る所で不協和音をかなで、この言説の自明性に疑問が投げかけられることになる。

モニカは、職業的自立ではなく、結婚を選ぶ。だが、そのあまりにも束縛に満ちた生活ゆえに、新婚早々悔やむことになる。ウイドソンは、妻にラスキン流の〈家庭の天使〉を求め、自らを、「成熟することができず」、「子供っぽい思い違いをして道を誤りがちな」(225)女という存在の「保護者」と考えている。そのため妻の一部始終を管理しようと努め、結局は自分の思い通りにならない妻の行動に激しく嫉妬するのである。語り手は、「家庭の喜び」(“The Joys of Home”)というアイロニカルなタイトルを持つ15章で、妻が、「妻という状態とは別個の権利と義務を持つことなど夢にも思わない」ウイドソンを、「完全な専制君主」、「男性独裁政治の生き残り」(173)と呼んでいる。

それに対してモニカは、徐々に「独立した自分自身の人生を生きる権利」(191)を主張し始め、夫に「反抗」するようになる。それによって彼女は、夫に徹底的に他者性を見せつけるのである。「女が公平な扱いを受けられれば」、「男と女の間には本質的な相違はないはずです」(185)、と。皮肉にも、彼女の口をついて出る言葉は、彼女がその一員になることを拒んだローダ・ナンやメアリ・バーフットたちのような「余計者の女たち」との交流によって習得したものだった。彼女自身は「本能的に」、メアリやローダらの主義に反対だと思い込んでいた。だがそれにもかかわらず、彼女の現在の「精神」と「それを口に出す勇氣」は彼女たちから与えられたものである。だからこそ嫉妬深いウィドソンが何よりも「疑いを抱き」恐れていたのは、妻が「私とは違った種類の間人と仲良くすること」(227)であり、とりわけ「新しい女」たちとの、またそこに入り出るエヴァラードとの「交流」によって、妻が妻としての「自然な義務」から逸脱することだった。

こうした夫との応酬の過程で次第にあらわになってくるのは、ローダやメアリが形成する女たちの共同体に対する、モニカのきわめてアンビヴァレントな感情である。しらずしらずのうちに、「みずからの意思に反して」、彼女たちの思想を反復してしまう彼女の無意識は、とりわけビーヴィスとの破壊的な恋愛において影を投げかけていくことになるだろう。モニカは、内心ではビーヴィスのことを、駆け落ちを迫ると怯んでしまうようなつまらない男だと感じている。しかしながら、駆け落ちの段取りのために奔走し、彼のために「屈辱」に耐えることによって、彼女は一層ビーヴィスの方にヒステリカルに押し出されることになる。

She came out of the shop with flushed cheeks. Another step in shameful descent—yet it had the result of strengthening once more her emotions favourable to Bevis. On his account she had braved this ignominy, and it drew her towards him, instead of producing the effect which would have seemed more natural. Perhaps the reason was that she felt herself more hopelessly an outcast from the world of honourable women, and therefore longed in her desolation for the support of a man's love. (281)

モニカがビーヴィスの方へと押し出されていくのは、彼女が彼を失うことを恐れたというより、むしろ汚辱に足を踏み出すことによって、「女たちの共同体」を失ってしまうことに深い絶望を感じたからのようにみえる。モニカはこの奔走によって、自らを、絶望的なまでに「りっぱな女たちの世界からの追放者」であり、女たちによって与えられていた錨から徹底的に切り離されてし

まったと感じる。そして「その侘しさ」から「男の愛情という支え」を求めざるを得ないと思ってしまうのだ。ここでの「りっぱな女たち」とは、彼女のような罪を犯していない「貞潔な女たち」であると同時に、ロードたちのような高次の目標に生きる「高潔な女たち」でもあるだろう。こうした葛藤の中で彼女は、ヒステリー症を発病する。ニーナ・アウエルバッハも、この一節に注目し、「因習的なモニカでさえも」、男たちより「女たちの共同体」を必要としたのだと書いているが(Auerbach 151)、ビーヴィスとの恋愛沙汰に際してヒステリー症を起こしてしまう、狂気のモニカの身体が語る無意識は、アウエルバッハの指摘よりもさらに雄弁に、彼女の欲望を語っているように思われる。次にみていくのは、女性に「自然な義務」を強要する言説に反抗するモニカの、狂気の身体が語る無意識の欲望である。

第3節 医科学と記号的身体

モニカが身に纏う境界性は、ロンドンという都市における移動性との関係だけではなく、当時流行の、骨相学、性科学、優生学などの医科学の言説を通して浮かび上がってくる。故郷のクリーヴドンに転地するという夫の決意を知らされ、動転してビーヴィスのフラットを訪れたモニカが、彼と同じフラットに住むエヴァラードとばったり出会った際に感じる、彼女の罪悪感 は次のように意識化されている。

She could not command herself. The shock had left her trembling, and the necessity of feigning calmness was a new trial of her nerves. Barfoot, she felt certain, was reading her face like a printed page; he saw guilt there; his quickly-averted eyes, his peculiar smile, seemed to express the facile tolerance of a man of the world. (260)

彼女は、このあたりをうろろろしている動機を、エヴァラードに知られてしまったと思込む。それは、彼女の感情が全てその顔に「印刷された文字」として表にあらわれ、その「罪」という文字を彼が読んだと確信したからに他ならない。だから「急いでそらした眼」や「奇妙な笑い」は、エヴァラードのような「世慣れた男」がすばやく事情を察したしるしなのだ、と考える。このことは『余計者の女たち』においては、単にモニカの思い違いとして片付けることのできない重要性を持っている。というのも、「目にみえるシニフィアンから、目にみえない内なるシニフィエを推論することが主要な作業である」骨相

学に代表されるように、人間の身体や精神を解明しようとする医科学への関心、またそれについての言及は、このテキストの随所にみうけられるからである。⁹

当時のヴィクトリア朝がいかに医科学の言説に捕われていたかは、ルドゥミラ・ジョーダノヴァ (Ludmilla Jordanova) が彼女の著作の冒頭に挙げている、イワン・ツルゲーネフ (Ivan Turgenev, 1818-83) の『父と子』(*Fathers and Sons*, 1862) の物語の例に明らかである。これまで長年研究に打ち込んできた田舎医師バザーロフは、彼が恋に落ちた相手の女性のすばらしい身体を讃えて、彼の恋心を、「いまずぐ解剖台の上に乗せてみたい」と口走ることによって表現する。というより、彼は自らの恋心をこう表現するほかにそのすべを知らない。¹⁰つまりここでは、恋する対象をもっと知りたいと願う男の欲望は、美しい身体の背後にある魅惑の秘密を解剖によって解明するという、科学の言説によって彩られているのだ。

同様に、エヴァラード・バーフットが〈新しい女〉ローダ・ナン (Nunn) に恋愛をけしかけるのも、彼が彼女に「好奇心」をくすぐられ、彼女の「尼僧」“nun”のような表情を読み取ってその内面を解明したいという「知的な」関心を抱いたからに他ならない。

He scrutinized her, at discreet intervals, from head to foot. To Everard, nothing female was alien; woman, merely as woman, interested him profoundly. And this example of her sex had excited his curiosity in no common degree. His concern with her was purely intellectual; she had no sensual attraction for him, but he longed to see further into her mind, to probe the sincerity of the motives she professed, to understand her mechanism, her process of growth. Hitherto he had enjoyed no opportunity of studying this type. (113-14)

恋愛や結婚にうつつを抜かす女たちに冷たい視線を投げかけ、いわゆる「余った」独身女性に職業教育を施すことに専念するローダの「心の中をもっとのぞきこんで」、「彼女がいった動機が心底からのものであるかを探り」、その「メカニズム」を理解したいという「実験精神」が、エヴァラードを彼女に向かわせる。従姉のメアリの所でローダと二人きりで顔を合わせるようになったエヴァラードは、彼女の顔の造作から、その内面を推し測ろうとする。彼が彼女の「目鼻立ちを観察する」のは、「秀でた額」から「脳味噌が詰まっている」ことを読み取るように、彼女の外見から、その本心を探るためである。外部に現われた表情という記号を解読し、感情を表に見せないローダの「仮面」

“mask”の下に隠された深部の意味を読み取りたいがためである。このように、彼がローダに求愛し、プロポーズまでしてしまう行為もまた、当時の科学的言説と深く絡み合っている。それゆえ、医科学的言説によって貫かれているこのテキストにおいて、登場人物たちの身体を解読しようとするわれわれ読者には、パメラ・K・ギルバート (Pamela K. Gilbert) の指摘するように、「身体は、その環境と完全に区別されることなく、その環境と相互に作用しあいながら、符号化して意味を生み出していくシニフィアンである」¹¹との認識が不可欠であることを、ここで確認しておきたい。

ローダが本当に自分を愛しているかどうかよりも、彼女が自分の求愛に応えるかどうかを試してみたいだけで、「ローダに真剣に恋をしたいとは思っていない」エヴァラードと、生まれてはじめて求愛されるという経験に直面して、有頂天になり、この勝利の快樂を味わいつくして自尊心を満足させたいだけのローラ。これまで恋愛経験のないことに引け目を感じていた彼女は、「恋愛はもはや他の女たちだけが独占しているわけではない」ことを喜び、「エヴァラードのような非常に多くの点で魅力的な、非常に多くの女たちから羨まれるような恋人を拒めば、自尊心を強めることができ」(168)、今後は自信を持ってフェミニストとして自らが選んだ道に邁進できると考える。そして、プロポーズを断りたいがために、彼のプロポーズを待ちわびる。互いに思いもかけず相手に本当に魅了されていることに気づき始めた後も、自由恋愛を申し出るエヴァラードと、法的結婚を要求するローダとの間の心理的な綱引きの中で、ふたりはあくまで意志の勝利にこだわり続けるのだ。そのため彼らの恋は、エヴァラードがモニカと特別な関係にあるかもしれないという疑惑の前に、あっさり崩れ落ちてしまう他はないのである。もっともふたりの関係においては、互いに同情の余地は、とりわけローダにはあると思える。以前にエイミー・ドレイクのような不道德な女と関係して子供まで産ませたことがあり、かつ現在はモニカと関係しているとの嫌疑がかけられているながら、誠実にその疑いを晴らそうとしないエヴァラードを簡単に信じることができないローダが、モニカに対する嫉妬に苦しめられ、その苦悩の結果、不安定な自由恋愛ではなく法的な結婚を望むのも、また一旦引き受けた法的結婚の申し出を断ってしまうのも、理解できることだろう。その彼女は、しばらくたって婚約を解消したことを激しく悔やみ、彼に対する欲望に苦しめられながら、かつて少女の頃に受けた深い失恋の痛手を思い返して痛恨の涙をながすことになるのだから。彼女が日頃の信条に反して法的な結婚を望んだことへの批判に対しては、当時のフェミニストが結婚のくびきから

逃れるために提唱した自由恋愛は、理想的な関係と思われていながら恋人の裏切りによって結局自殺に終わったエリノア・マルクス (Eleanor Marx) の例にみられるように、しばしば男性に心変わりの自由を保障する男性に都合のよい形態でもあったという当時の現実にも、注意を促しておきたい。¹²

後になってローダは、モニカとエヴァラードとの間には何ら特別の関係がなかったことを知るのだが、モニカとローダとエヴァラードをめぐる三角関係は、物語展開上だけでなくモニカのヒステリー症との関連においても、焦点を当てて分析されるべきであることを、次にみておきたい。

第4節 ヒステリー症の身体を読む

物語の中で何度かヒステリー症の発作に見舞われるモニカは、先にみたように「半分はレディで半分は売り子」(120)となるべく育てられるという、二つの階級の間で引き裂かれた極めて不安定な立場に置かれていた。それと同時に彼女は、当時の進歩的な女性解放思想に触れながら自活の道を歩むことも出来ず、かといってウイドソンが強いる「家庭の天使」としての性役割を受け入れることも出来ない。そのためモニカは、階級とジェンダーにおいて二重に境界性を刻印された存在だといえる。モニカのヒステリー症が発現するのは、彼女のこうした二重拘束的な位相においてである。夫に付き添ってクリヴドンに行くことも、ビーヴィスとの駆け落ちもかなわぬまま、進退きわまって発症する彼女の致命的なヒステリー症の発作は、物語の最後には彼女の命まで奪うことになるのである。

そもそも、「子宮」“*hystera = uterus*”を語源に持つことからしばしば「女性の病」“*a female malady*”とみなされてきたヒステリー症は、実は極めて性的に境界侵犯的な病なのである。なぜなら、神経症患者であった少女イダ・パウアー (Ida Bauer) の症例録「ドラ」(“*Dora: An Analysis of a Case of Hysteria,*” 1905)におけるフロイトの苦闘の痕跡が示しているように、この病理は、性的自己同一性の混乱の病でもあるからだ。この症例録においては、失語症によって、K夫人への社会的規範を逸した(ホモセクシュアルな)愛を沈黙へと封じこめ、身体の麻痺によってその欲望を語るドラの身体の言語と、彼女のセクシュアリティを異性愛の鋳型にはめようとするフロイトの男性中心主義的な言説とが激しくぶつかりあう。そして、当初彼女の中に異性愛を読み取ろうとしていたフロイトは、彼女の内に隠された同性愛によってその言説を攪乱され、次第にヒステリー症を両性性と結びつけるに至る。だからヒ

ステリー症とは、「男性とも女性とも自己を同一視し、一方の性だけのアイデンティティを選ぶことは出来ない」という病理なのである。¹³

一見、男女間の「自然な」恋愛にのみ捕われているようにみえるモニカにも、こうした両性具有性は容易に窺える。それが最も顕著に表われているのは、エヴァラードを間に挟んだローダとの一種の三角関係においてである。モニカは、エヴァラードと楽しげに対話する姿を夫に見せつけたり、ビーヴィスではなくエヴァラードが恋人なのだと言いつつまで尾行してきた探偵に（結果的に）誤解させたりもする。当然そこには、無意識のレベルであるにしても、モニカのエヴァラードに対する好意以上の感情が嗅ぎとれるのだが、それはむしろ、二人のあいだにローダが介在するからである。つまり彼への欲望は、モニカ自身も表明しているように、彼女（モニカ）の、ローダに対する深い関心から派生しているのだ。「パーフットさんに対する関心は、あなたのことがあったからに過ぎません」(359)。(これが限りなく愛の告白に近いことに注目したい。)つまりここでは、エヴァラードに愛されているローダへの欲望と、ローダに愛されている(らしい)エヴァラードへの欲望、は互いに循環しあっている。モニカは、エヴァラードと語り合うこと自体よりも、エヴァラードと(ローダについて)語ることに喜びを見いだしていたのだと言うべきなのかもしれない。エヴァラードにとってローダは「神秘」だと告白されたモニカが、女性にとっても、「ある女性は・・・男性にとってと同じくらい、神秘的なのです」(225)と告げる時、明らかに彼女は、心の高揚をエヴァラードと共有しあっている。

「パーフットさんに対する関心は、あなたのことがあったからに過ぎません」と告げるモニカの、男性性への同化が示すこうした性的同一性の攪乱は、性別によるアイデンティティの押しつけを「自然」とみなすヴィクトリア朝家父長制の言説にとっては、異質なものであるだろう。もちろん、たとえモニカが以前よりは雄弁になったにしろ、彼女がその無意識の欲望を言語化しえるわけでは決してない。それは彼女のヒステリー症の肉体に託されている。エレヌ・シクスー (Hélène Cixous) が強調するように、ヒステリー症患者はまさしく、言葉によって語りえない欲望を「身体が語る存在」なのだ。このヒステリー患者は、もし自分の欲望を語る言葉を獲得しえたならば、「家族や社会制度を解体してしまうだろうような」、「革命的な力」を内包している。¹⁴このように、モニカの身体は無意識のうちに、「妻としての自然な義務」だけでなく、異性交のみを「自然」とみなす家父長制イデオロギーを裏切りつつ、「自然らしさ」を装った言説に抵抗する。

当時ヒステリー症がいかにかに流行していたかは、『余計者の女たち』の中でも、点描として登場する何人かの女性たちがこの病を患っていることから、容易に推測できるだろう。ギッシング自身、この病理には大きな関心を抱いていたらしく、『渦』の中でも、もうひとりのヒステリー症のヒロインを描いている。彼女はモニカと同様、〈新しい女〉になろうとしてなれなかった女性として、ここで併せて言及しておきたい。ただ、アルマ・フロシingham (Alma Frothingham) がモニカと大きく違っているのは、彼女が〈新しい男〉といってよいような理解力のある夫のもとで、結婚後も当時としては例外的に自由に行動することが許されたという点である。上流階級の娘として、何不自由なく育ったヒロイン、アルマは、父親の事業の失敗による自殺によって、ほとんど一文無しの状態に投げ込まれる。そんな彼女は、周囲の勧めもあって、ヴァイオリニストとして成功し自立して生きることを夢みるようになる。その願望は、読書三昧の隠遁生活を理想とする独特の人生観を持つハーヴェイ・ロルフ (Harvey Rolfe) と結婚した後も、消え失せることはない。だから夫に評価されていないと感じ始めていたアルマは、夫を始めとする周りの人々を見返したいという虚栄心から、さらには知性と洗練された身のこなしとを兼ね備えた年上のシビル・カーナビイ (Sibyl Carnaby) への対抗心から、大金持ちの社交界の実力者サイラス・レッドグレイヴ (Cyrus Redgrave) の助けを借りて、ヴァイオリニストとしてのプロ・デビューを果たそうとする。結局、彼の助けを借りたデビュー・コンサートは何とか乗り切ることができるものの、彼女は狂騒の「渦」の中で精神の平衡を失い、ヒステリーの発作の後に睡眠薬の飲み過ぎで死んでしまう。ここで極めて興味深いのは、アルマのレッドグレイヴへの傾斜が、彼と特別な関係にあるようにみえるシビルへの競争心と嫉妬心から発していること、アルマのシビルに対する当初の崇拜がほとんど同性愛に近い感情であったことである。フロイトは嫉妬心とは、「抑圧された同性愛的衝動と、その衝動への防御」に他ならないのだと論じているが、¹⁵ この指摘はアルマの心理をきわめて的確に言い当てているようにみえる。フロイト自身が感じていたように、アルマのようなヒステリー症患者は、女性の性愛の複雑さを露呈してくれるという点で極めて注目に値するし、またギッシングによるこうした女性の心理描写の的確さとその観察力には感嘆せざるをえない。

『余計者の女たち』における女たちの関係は、ギッシングが『渦』の中で描いて見せた、ヒステリー症の女主人公アルマのシビル・カーナビイに対する愛憎ないまぜの激しい関係ほどに露わなものではない。ただ、女性の心理に

すぐれた洞察を見せるギッシングが、この小説を女たちの前エディプス的な関係に強勢を置いて終らせていることは注目しておくべきだろう。エヴァラードとの間の疑いを晴らすべく、ローダに真実を告げるクライマックスともいべき先の場面で、ローダと共感をわけ合うことによって、始めてモニカは生きる力を与えられる。同時に、恥をしのんで真実を語ったモニカの誠意に応えようと彼女を励ますローダは、励ますことによって彼女自身が励まされ、自らの使命を再確認する。ローダがエヴァラードと再会した折に、ためらうことなく再度プロポーズを断るのも、その折に「女性の権利のために闘う女のひとりになる」(364)という目標を誓い合い、モニカと熱いキスをかわしあったからである。ギッシングは、テキストの最後で、ローダにモニカ亡き後、モニカが遺した娘を訪れさせているが、これもふたりの女たちの絆が次の世代にまで受け継がれて行くことを暗示しているといえよう。

ヒステリー症を病むモニカの内に、われわれは両性をめぐる牽引と反発のダイナミズムを見てきた。それゆえ、都市を自在に彷徨し、セクシュアリティの境界を一時的にでも攪乱するモニカのヒステリー症の身体は、まさに「性的無秩序」の時代にふさわしい、世紀末を表象する記号的身体であるといえるだろう。店員出身のモニカのように、階級的にもジェンダーの境界においても曖昧な女性の内面描写のほうが、ローダのような知的な女性の描写よりもはるかにリアルで、かつ輝きを放っていることは、ギッシングの最初と二度目の結婚相手が階級的に下層であったこと、どうやら彼がこうした女性に牽引される傾向にあるらしいことと、大いに関係しているかもしれない。

第5節 ギッシングの内なる二重基準

『余計者の女たち』でギッシングは、女たちのホモソーシャル関係の間に、無意識の同性愛を透かして見せてくれている。だが、彼のこうした女性心理に対する明察の一方で、それとはあまりにも不釣り合いな程に辛辣な女性批判が、このテキストには見受けられる。

友人たちの近況を次々と報告していくなかで、精神病院に入っているポプルトン (Poppleton) に触れてエヴァラードは次のように言う。「彼の狂気は」、冗談を解さない頭の固い妻に「繰り返し冗談を説明しなくてはならない」(90)ことが原因である、と。その真偽はともかく、エヴァラードによる男たちの近況報告の中では、愚かな女と結婚した男たちの生活の破綻といった事例にこと欠かない。エヴァラードの兄トムの結婚は、そのうちでも、生命を落と

すという致命傷にまで至った最も深刻なものといえよう。「愚かで下品な女」を妻に持ったトムは、彼女との結婚によってせつかくの才能が損なわれてしまったと思われていた。しかも彼の場合、損なわれたのは才能だけに留まらない。妻の願いで、落馬事故によって怪我をした彼にとっては無謀ともいべき転地を繰り返す、不実な妻をロンドンに追って三日間探し回るといふ暴挙のあげく、トムはあっけなく死んでしまうのである。その妻は、「栄養不良のせい、元来のひねくれた性格のせい」(214)、いつも訳の分からない種々の病気にかかっている「ヒステリー気味」の女性であった。もちろんこれらの報告は、エヴァラードによって、もしくは語り手によって一方的に為されているために、妻の側からの証言がわれわれに与えられることはない。ローダの「男たちはなぜ馬鹿と結婚するのでしょうか」(91)という質問は、エヴァラードの発言の正しさを立証しているかのようである。店員の職の悲惨さを訴えるモニカに、改革を推し進めるためには、「女の子たちが道ばたで倒れ、飢え死にしたらいいのよ」(38)と言っているローダの女性嫌悪は、明らかにエヴァラードのそれと同質であるだろう。

さらにまた、ギッシングの労働観が男女の間の二重基準に拠っていることにも言及しておきたい。この小説の中心テーマにおいては、ローダやメアリが携わる、女性のための職業訓練所による職業的自立を奨励しておきながら、その一方でギッシング自身もしくは語り手は、職業を持つことを卑しいものとして怠惰をきめこむ男性たち、特にエヴァラードのような男性に自己同一化してしまうあたりに、そうした矛盾が如実に露呈してしまっている(Selig, *George Gissing* 64-65)。

ギッシングは、ローダのような「新しい女」や、モニカのように流動する社会制度の狭間で揺れ動く女を、肉体を備えた存在として描くことで、制度としての結婚をその内側から批判してみせている。その一方で、エヴァラードを介して示す、女の愚かさへの容赦のない非難と辛辣な姿勢、そして男女の労働観をめぐる二重基準は、女に対する彼の態度が大きく分裂していることの表われでもあるだろう。しかしながら、ギッシングの女性観がフェミニスト的でありながら同時に因襲的でもある、という批判がある一方で、世紀末の都市を彷徨する女性たちの輝きとその心理を鋭く描き出す筆致が、独得の魅力を放っていることもまた否定できないのである。

註

テキストは George Gissing, *The Odd Women*, edited and with an introduction by Elaine Showalter (Harmondsworth: Penguin, 1983) を使用した。

- 1 Janet Wolff, *Feminine Sentence: Essays on Women & Culture* (Cambridge, Eng.: Polity, 1990) 31. 「フラヌール」について最初に論じたのはベンヤミンで、彼はボードレールの作品を分析するに際して、「フラヌール」、アーケード、世界博覧会などの文化的産物どうしの間の関係を探りながら、商品資本主義のイメージという観点からボードレールの作品分析を試みている。Walter Benjamin, *Charles Baudelaire: Lyric Poet in the Era of High Capitalism*, trans. Harry Zohn (London: New Left, 1973).
- 2 Judith R. Walkowitz, *City of Dreadful Delight: Narratives of Sexual Danger in Late-Victorian London* (Chicago: U of Chicago P, 1992) 21.
- 3 この点に関しては、Walkowitz, *City of Dreadful Delight* および Elizabeth Wilson, “The Invisible Flaneur,” *New Left Review* 191 (January/February 1992) を参照。
- 4 シュライナーの伝記的事実については、Ruth First & Ann Scott, *Olive Shreiner* (New Brunswick, NJ: Rutgers UP, 1980) に拠っている。
- 5 「女余り現象」を扱った W・R・グレッグの有名な論文 “Why Are Women Redundant?” に関する議論については、Mary Poovey, *Uneven Developments: The Ideological Work of Gender in Mid-Victorian England* (Chicago: U of Chicago P, 1988) の第1章に詳しい。
- 6 ハーパーの議論については、Sally Ledger, “The New Woman and the Crisis of Victorianism,” *Cultural Politics at the Fin de Siècle*, ed. Sally Ledger and Scott McCracken (Cambridge, Eng.: Cambridge UP, 1995) に詳しい。
- 7 この点については、Liz Hedgecock, “‘A Man of His Day’: Literary Evolution and Masculinity in George Gissing’s *New Grub Street*,” *Signs of Masculinity: Men in Literature 1700 to the Present*, ed. Antony Rowland, Emma Liggins and Eriks Uskalis (Amsterdam: Rodopi, 1998) を参照。
- 8 この議論については、Poovey の第1章を参照。
- 9 医科学の持つ記号解読的側面については、Ludmilla Jordanova, *Sexual Visions: Images of Gender in Science and Medicine between the Eighteenth and Twentieth Centuries* (New York: Harvester, 1989) に詳しい。
- 10 ジョルダノーヴァは、このエピソードの社会的・文化的背景を解明するのが彼女の本の目的だと、その序論で述べている。Jordanova の序論参照。
- 11 Pamela K. Gilbert, *Disease, Desire and the Body in Victorian Women’s Popular Novels* (Cambridge, Eng.: Cambridge UP, 1997) 16.
- 12 エリノアのエドワード・エイヴリングとの不遇な恋愛については、Elaine

- Showalter, *Sexual Anarchy: Gender and Culture at the fin de siècle* (New York: Penguin, 1990) に詳しい。
- 13 Elaine Showalter, *The Female Malady: Women, Madness, and English Culture, 1830–1980* (New York: Penguin, 1985) 160.
- 14 Hélène Cixous and Catherine Clément, *The Newly Born Woman*, trans. Betsy Wing (Minneapolis: U of Minnesota P, 1986) 154. ここで二人の批評家は、フロイトの「ドラ」の症例録の患者ドラが、社会の犠牲者であるのか、それとも社会を変革するヒロインのような存在であるのかをめぐって、議論を展開している。
- 15 フロイトのこの議論についての詳細は、Judith Butler, *Bodies That Matter: On the Discursive Limits of "Sex"* (New York: Routledge, 1993) 180 を参照。

* この論文は、「拘束と解放の狭間で—*The Odd Women* における記号的身体」(『英語青年』1995年7・8月号)を大幅に加筆・修正したものである。

(武田美保子)